

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00033

研究課題名(和文) 道理性概念の研究

研究課題名(英文) studies on the concept of reasonableness

研究代表者

吉満 昭宏 (YOSHIMITSU, Akihiro)

琉球大学・人文社会学部・准教授

研究者番号：10585227

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においては、われわれ三人は「道理性(reasonableness)」という概念の基礎と応用について、各人の専門領域に応じて、検討した。その成果は、12本の雑誌論文と2件の学会発表となって結果した。また最終年度には、その総決算として、報告書『道理性概念の研究』(123頁)を発行することでもできた。

本研究の結果、道理性概念に基づく「道理的クリティカル・シンキング」を確立する目的が付き、また医学・看護学へのその応用も有効であることが判明した。更には、道理性と密接な概念である「決疑論(casuistry)」についても、その歴史的な背景を探り、また新たな観点を提示することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

道理性とは、大まかには「不確実性を伴う実践的な場面における理に適った思考法の特性」を意味し、近代的な「合理性(rationality)」の概念と相補的な概念である。「現代」という時代の思想的特徴ともされるこの概念について、通時的・共時的観点から、より明確にできたこと、この概念に基づく学問的方法論を確立する目的が付いたこと、この方法を医学と看護学に応用してその有効性を示せたこと。これらの成果は、実践的な諸分野(例：教育・医療・ビジネス)における、この概念に基づく方法の有効性を期待できるものであり、この点において、その学術的・社会的意義はそれなりにあるものと思われる。

研究成果の概要(英文)：In our studies on "reasonableness", according to each specialized field, we examined a foundation and applications of the notion. Our investigations resulted in twelve research papers and two presentations in conferences. In the final year, we summed up our studies to publish a research report titled 'Studies on the Concept of Reasonableness' (with 123-page length).

Due to our research project, we had some prospects for the construction of "reasonable critical thinking" based on the concept of reasonableness, and it turned out that its application to medicine and nursing is viable. Moreover, we investigated "casuistry", closely related to reasonableness, from a historical point of view, and proposed a new kind of respect thereof.

研究分野：哲学

キーワード：道理性 クリティカル・シンキング 決疑論 S・トゥールミン 合理性

## 1. 研究開始当初の背景

1950年代を境にして、英語圏の哲学において「実践哲学」への関心が沸いてきた。その火付け役となったのは、L.ウイトゲンシュタインの『哲学探究』(1953年)だとされる。その影響を受けて、言語哲学では「日常言語学派」が生まれ、倫理学から「行為論」が独立し、倫理学では人柄に焦点を当てた「徳倫理」が復活し、各種の「応用倫理学」が社会のニーズに応える形で誕生し、論理学の分野ではより日常の推論に適した「非形式論理学」が生まれ、これは教育分野との提携の下で「クリティカル・シンキング」(以下、「CT」と略。)として実践されてきた。これらは哲学における「実践的転回」とでも呼べる出来事であり、この流れは21世紀前半の現在では「基礎付け主義的な理論哲学」に取って代わったと言ってもよいほどである。この実践的転回を特徴づける重要な概念が「道理性(reasonableness)」である。これは大まかには、「不確実性を伴う実践的な場面における理に適った思考法の特徴」を意味し、近代的な「合理性(rationality)」の概念と相補的な概念である。この概念の提唱者の一人が、ウイトゲンシュタインの門下生にして、[3]『議論の技法』(初版:1958年)で非形式論理学を一躍有名にしたS.トゥールミン(1922~2009)である。彼は後年の著作([1][2])において、この概念を詳しく論じており、[1]では通時的な分析がなされ、それを承けて[2]では共時的な分析がなされている。まず[1]によると、「近代」は三つに区分され、第一期は14~16世紀のルネサンスの時代で、人間味溢れた「道理性の時代」であり、第二期が17~20世紀前半の狭義の「近代」で、幾何学や論理学といった絶対確実な演繹をモデルとする「合理主義の時代」であり、第三期が20世紀後半から今日に至る時代で、「合理性と道理性が共存する時代」である。次に[2]によると、その第三期について、経済学や倫理学などを引き合いに出して、どのようにして、多くの学問分野で道理性と合理性のバランスが取れたものに至ったのか、そして、その哲学的な含意について論じている。

以上の道理性の考え方は、その実践的側面として環境倫理や生命倫理に加えて、教育において身に付けるべき能力に関する国内外の議論とも大きく関連する。国内では、文部科学省の「生きる力、学力の三要素」[4]「高大接続システム改革会議「最終報告」」(p.6)での「答えが一つに定まらない問題に解を見出していく」、あるいは新しく注目を集めている国立教育政策研究所の[5]「教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書5」での「21世紀型能力」と「多くの複合的な問題...は、問題を共有する者が、知識やアイデアを出し合って、不確実にせよ解を出して実行し...」(p.9)等が関連している。更に海外においては、OECDのDeSeCoプロジェクト(1997~2003年)における「キー・コンピテンシー」やアメリカ合衆国における「21世紀型スキル」等が関連している。

## 2. 研究の目的

以上を踏まえて、本研究の目的は、「道理性とは何か?」を、その概念の批判的検討を通して明らかにし、その成果を他の分野に応用することである。更には本研究の成果を基にして、CTの教科書や道理性に関する著作を出版することも目指す。まずは原理編として、道理性の概念について、トゥールミンや他の論者の文献を基にして批判的に検討する。その際、特に核心となる問いは、「蓋然性」や「不確実性」を扱う数理である「確率論」をどう位置づけるか?」である。と言うのも、確率論はまさに17世紀の合理主義の時代に研究され始めたが、確率という帰納的な考え方は、先のトゥールミンの記述とは何か齟齬をきたしているように思われるからである。この点はトゥールミンの文献でもあまり明確に扱われていない観点であり、この辺の事情は、I.ハッキングの文献([6])を比較・検討することで、

新たな知見を打ち出したい。またトゥールミンは、道理性と合理性のバランスが考慮され始めた時代が、20世紀後半以降の特徴であり、これがもつばら「合理性」を目指していた「近代（モダン）」とは区別されるべき点であると述べている。「このようなバランスの取れた現代の時代は、いわゆる「ポスト・モダン」であり、近代を超える重要な考え方であるか？」という問いも、他の論者（例えば、[7]）との比較の下で、探究する。

次に応用編として、道理性概念を実践的な学問分野へと応用することを試みる。その際には、非形式論理学、決疑論、生命・医療倫理、意味論的パラドックスへの応用、また環境倫理における合意形成の検証や、教育におけるコンピテンシー等の議論の明確化が、検討されることになる。

### 3. 研究の方法

本研究は、原理編として、トゥールミンの道理性の概念を、他の論者（例えば、J.ロールズ）の道理性の概念と比較しつつ、批判的に検討し、その概念をより実り豊かな方向へと拡充していく。例えば、「2. 研究の目的」でも述べたように、「蓋然性」とその数理化である「確率論」が、道理性と合理性の両方に関係していることを明らかにする。その応用編としては、例えば、文脈・状況の概念による意味論的パラドックスの解決、教育におけるコンピテンシー等による「解」を道理性と最適解として捉えてその意味を解明すること、倫理的問題の穏健な解決法として決疑論の可能性を探ることが挙げられる。

以上を踏まえて、時系列上の研究計画と方法は、下の「表1」の通りになる。研究の方法は「文献研究」と「関連する研究者へのインタビュー調査」によって行われ、研究の力点は、原理編から応用編へと次第にシフトしていくことになる。そして、最終年度には本研究の成果を英米哲学系の学会でのワークショップの形で発表し、広く検討してもらう予定である（ただし、進捗状況次第によっては、2年目以降の研究計画は柔軟に見直されることになる）。

最後に、本研究での役割分担は下の「表2」の通りである。代表者である吉満は、道理性概念の比較検討という原理研究と、非形式論理学、意味論的パラドックスへの応用研究を担当する。研究分担者である浜崎は、古代ギリシア思想（特にアリストテレスの「フロネーシス」）の観点からの道理性概念の検討という原理研究と、環境倫理や教育におけるコンピテンシー等への応用研究を担当する。もう一人の研究分担者である大城は、近世・近代哲学史の観点からの道理性概念の検討という原理研究と、決疑論や生命・医療倫理への応用研究を担当する。なお、吉満と浜崎はCTに関する共同研究を研究会の形で既に半年に亘り、15回行っており、また吉満と大城は道理性概念および決疑論に関する共同研究を勉強会の形で行う予定で、その準備を始めている。

**表1 研究計画表**

	原理編	応用編	対外活動
1 年 目	・道理性概念の比較に基づく基礎研究	・いくつかの分野（教育など）での着手	・CT教育に関する国内調査
2 年 目	・確率論と道理性概念の関係に関する研究	・決疑論 ・生命・医療倫理 ・環境倫理	・CT教育に関する海外調査 ・国内での学会発表
3 年 目	・道理性概念の歴史的考察 ・道理性概念の総括	・意味論的パラドックス ・教育におけるコンピテンシー	・道理性概念に関するワークショップの開催

表2 各担当者の遂行する研究領域

	原理	応用
吉満	道理性概念の比較検討、確率論と合理性・道理性との関係	非形式論理学、意味論のパラドックス
浜崎	アリストテレス哲学と道理性の関係、最適解導出と道理性の関係	環境倫理、教育におけるコンピテンシー
大城	道理性の概念の歴史的検討、道理性とポスト・モダン論の関係	決疑論、生命・医療倫理

#### 参考文献（初出順）

- [1] Toulmin, S. (1990) *Cosmopolis*. Free Press. (『近代とは何か』. 法政大学出版局. 2001年.)
- [2] Toulmin, S. (2001) *Return to Reason*. Harvard University Press. (『理性への回帰』. 法政大学出版局. 2009年.)
- [3] Toulmin, S. (2003) *The Uses of Argument (updated edition)*. Cambridge University Press. (『議論の技法』. 東京図書. 2011年.)
- [4] 文部科学省. 高大接続システム改革会議「最終報告」. 2016年.
- [5] 国立教育政策研究所. 教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書 5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程の基本原則. 2013年.
- [6] I.ハッキング著. 広田すみれ・森元良太訳. 『確率の出現』. 慶応大学出版会. 2013年.
- [7] J.-F.リオタール著. 小林康夫訳. 『ポスト・モダンの条件』. 水声社. 1986年.

#### 4. 研究成果

ここでは研究成果を、三つに分けて説明する。一つ目は、吉満・浜崎による「道理性概念に基づくCTの研究」である。二つ目は、吉満・大城による「決疑論の現代的研究」である。三つ目は、大城による「決疑論の歴史的研究」である。

一つ目（吉満・浜崎による「道理性概念に基づくCTの研究」）に関して。吉満と浜崎は月2回のペースで勉強会を重ねて、道理性概念に基づくCTの研究に取り組んできた。その成果は[7]~[11]である。まず、「道理性概念に基づくCT」の理論枠組として、C.S.パースの「探究の論理学」とL.ライトの「探求的診断法」に注目した。その成果は[7]、[8]、[9]前半である。次に、そこで得られた理論枠組を基にして、医療現場での「臨床判断」に応用した成果が、[9]後半、[10]である。なお[11]は、そのタイトル通り、道理的クリティカル・シンキングの基礎と応用について、上記の諸論文をベースにした総決算的なものとなっている。また、ライトの方法の枠組に関しては、日本で初めての紹介であり、その点でも貴重なものとなっている。

二つ目（吉満・大城による「決疑論の現代的研究」）に関して。吉満と大城は、散発的に勉強会を開き、道理性と密接な関係にある「決疑論」について、その現代的な意義と応用を模索してきた。その成果は[12]である。ここでは決疑論が方法だけでなく、「妥協的態度」という態度的側面も持ち合わせていることを指摘して、悪く言われがちな「妥協」の倫理的意味を論じ、これが応用哲学・倫理においても有効であることを示した。[12]を再録した[1]では、「付記」として、道理性と決疑論の関係についても触れている。なお、決疑論への諸批判に対する考察と検討は、今後の課題として残されており、目

下、取り組んでいる最中である。

三つ目（大城による「決疑論の歴史的研究」）に関して。上に見たように決疑論には批判も多い。これは17世紀以来のことで、歴史的研究も必要となる。**[3]**、**[4]**、**[6]**では決疑論の神学的背景、**[5]**ではこの名で呼ばれなくとも決疑論的思考が生かされた場合があること、**[2]**では非妥協的な態度が倫理的実践では必ずしも最善でないという指摘が過去にもあったことを確認し、上記の二つ目の研究方向への道筋をつけた。しかし当初予定していた歴史的研究を現代倫理学の方法に繋げるための検討に本格的には立ち入れず、今後の課題として残っている。

以上の三つの観点からの研究成果を収めたのが、最終年度に出版された**[1]**となっている。なお、2年目にあたる**2020**年度からコロナ禍による活動制限の影響を受け、当初の研究計画（表1参照）から大きくずれてしまい、文献研究がメインとなってしまったこと、また活動制限による財政上の事情から期間を1年延期することになったことを断っておく。

吉満昭宏（編）：

**[1]** 『道理性概念の研究』（科研費研究成果報告書）**2023**年、琉球大学人文社会学部人間社会学科、**123**頁。

大城信哉（著）：

**[2]** 「一七世紀英国プロテスタント神学における確かなものと不確かなもの ピューリタン決疑論の場合」、『西日本哲学年報』第**27**号、**2019**年、**1-23**頁。

**[3]** 「17世紀イングランド決疑論の用語法について 決疑論・事例神学・良心的事例」、『沖縄県立芸術大学紀要』第**28**号、**2020**年、**1-16**頁。

**[4]** 「イングランド型プロテスタント道徳神学の初期形態 キリスト者の指針と良心的事例集」、『沖縄県立芸術大学紀要』第**29**号、**2021**年、**15-30**頁。

**[5]** 「初期アングリカニズムとふたつの決疑論」、『沖縄県立芸術大学紀要』第**30**号、**2022**年、**43-58**頁（**[1]**に、一部改変して再録）。

**[6]** 「イングランド宗教改革神学と「現世的」なもの 「マキアヴェリ主義的」といわれたものと決疑論」、『沖縄県立芸術大学紀要』第**31**号、**2023**年、**51-68**頁。

吉満昭宏・浜崎盛康（共著）：

**[7]** 「クリティカル・シンキングにおける発見と正当化」、『人間科学（琉球大学人文社会学部人間社会学科紀要）』第**40**号、**2020**年、**29-61**頁。

**[8]** 「L.ライトの診断的論証と非言語的要素」、『人間科学（琉球大学人文社会学部人間社会学科紀要）』第**41**号、**2021**年、**113-157**頁。

**[9]** 「L.ライトの探求的診断法と医師の思考法」、『人間科学（琉球大学人文社会学部人間社会学科紀要）』第**42**号、**2022**年、**139-191**頁。

**[10]** 「クリティカル・シンキングの定義と看護過程」、『人間科学（琉球大学人文社会学部人間社会学科紀要）』第**43**号、**2023**年、**187-242**頁。

**[11]** 「道徳的クリティカル・シンキングの基礎と応用」**[1]**に収録、**3-86**頁。

吉満昭宏・大城信哉（共著）：

**[12]** 「決疑論は方法か態度か」、『Nagoya Journal of Philosophy』第**15**号、**2021**年、**33-47**頁（**[1]**に、一部改変して「付記」も付して再録）。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 吉満昭宏 浜崎盛康	4. 巻 43
2. 論文標題 クリティカル・シンキングの定義と看護過程	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人間科学（琉球大学人文社会部人間社会学科紀要）	6. 最初と最後の頁 187-242
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉満昭宏 浜崎盛康	4. 巻 -
2. 論文標題 道理的クリティカル・シンキングの基礎と応用	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 道理性概念の研究	6. 最初と最後の頁 3-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大城信哉	4. 巻 31
2. 論文標題 イングランド宗教改革神学と「現世的」なもの 「マキアヴェリ主義的」といわれたものと決疑論	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 沖縄県立芸術大学紀要	6. 最初と最後の頁 51-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大城信哉	4. 巻 30
2. 論文標題 初期アングリカニズムとふたつの決疑論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 沖縄県立芸術大学紀要	6. 最初と最後の頁 43-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉満昭宏 浜崎盛康	4. 巻 42
2. 論文標題 L.ライトの探求的診断法と医師の思考法	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人間科学（琉球大学人文社会部人間社会学科紀要）	6. 最初と最後の頁 139-191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉満昭宏 大城信哉	4. 巻 15
2. 論文標題 決疑論は方法か態度か	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Nagoya Journal of Philosophy	6. 最初と最後の頁 33-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/nagjp.15.33	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 浜崎盛康	4. 巻 5
2. 論文標題 生と死とスピリチュアルケア	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 スピリチュアルケア研究	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉満昭宏 浜崎盛康	4. 巻 40
2. 論文標題 L.ライトの診断的論証と非言語的要素	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人間科学（琉球大学人文社会部人間社会学科紀要）	6. 最初と最後の頁 113-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大城信哉	4. 巻 29
2. 論文標題 イングランド型プロテスタント道德神学の初期形態 キリスト者の指針と良心的事例集	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 沖縄県立芸術大学紀要	6. 最初と最後の頁 15-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉満昭宏 浜崎盛康	4. 巻 40
2. 論文標題 クリティカル・シンキングにおける発見と正当化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人間科学 (琉球大学人文社会部人間社会学科紀要)	6. 最初と最後の頁 29-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉満昭宏	4. 巻 -
2. 論文標題 条件文の分類と意味論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 因果・動物・所有, (宮園健吾他編・武蔵野大学出版会)	6. 最初と最後の頁 109-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大城信哉	4. 巻 27
2. 論文標題 一七世紀英国プロテスタント神学における確かなものと不確かなもの ビューリタン決疑論の場合	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 西日本哲学年報	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 大城信哉	4. 巻 28
2. 論文標題 17世紀イングランド決疑論の用語法について 決疑論・事例神学・良心的事例	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 沖縄県立芸術大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 大城信哉
2. 発表標題 17世紀イングランド・ピューリタンの現実的態度について
3. 学会等名 西日本哲学会第71回大会口頭発表 (オンライン)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 浜崎盛康
2. 発表標題 生と死とスピリチュアルケア (公開基調講演)
3. 学会等名 日本スピリチュアルケア学会 第13回学術大会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 吉満昭宏 (編)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 琉球大学人文社会学部人間社会学科	5. 総ページ数 123
3. 書名 道理性概念の研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	浜崎 盛康  (HAMASAKI Moriyasu)  (30208574)	琉球大学・人文社会学部・客員研究員    (18001)	
研究分担者	大城 信哉  (OSHIRO Shinya)  (20836259)	琉球大学・人文社会学部・非常勤講師    (18001)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関